Japanisches Abstract

要旨

「ケータイ小説 ― 日本における読書現象」

技術革新で知られる日本は２００７年以降ケータイ小説によって世界的な電子文学をめぐる議論の火付け役ともなった。２００７年のベストセラー１０作の内、５作までもが当初ケータイ小説として書かれ、その後印刷・出版されたものであった。作者は主に素人の女性作家らである。その成功は出版社や作家はもとより出版界をも驚かせた。

本書はケータイ小説を文学、技術、若者文化とメディア経済の中のひとつの現象として考察する。導入として携帯可能なインターネットの構造と日本の出版市場の構造を俯瞰したうえで、代表的な作家とその作品、さらには日本でのケータイ小説をめぐる賛否両論について分析する。「ケータイ小説」は一部若者のコミュニケーション文化であると理解すべきなのか、若年層全般を読書へと誘うあたらしい現代文学のあり方なのかという問いを投げかけている。